

調査員・平井と、新人の調査員・内野が公園にいる。

内野の手には分厚い調査マニュアルがある。

平井 「つまりさ、影になれてことなんだよな」

内野 「影…」

平井 「そうそう、影」

内野 「影…」

平井 「ほら、何頁だっけ、あるだろ、どっかに」

内野、マニュアルをめくる。

平井 「当社が厳選する調査員は、決してあなたの生活を脅かしません」

内野 「…ああ」

平井 「影になって、うずくまったりやいいんだよ」

内野 「…平井さん、何年目ですか」

平井 「二ヶ月」

内野 「二ヶ月？」

平井 「いや、そもそもさ、この調査自体が、今年になってから立ち上がってるんだよ。俺は三月の二次募集で採用されたから、まだ二ヶ月」

内野 「二ヶ月で、何件の調査に行ったんですか」

平井 「四軒」

内野 「ひと月に二軒ですか」

平井 「うんそう」

内野 「きついですね」

平井 「うん、まあな」

内野 「それでやってけますか」

平井 「うん…」

内野 「二軒が三日間で一万八千円、ひと月三万六千円にしかならないでしょ」

平井 「そうね」

内野 「どうやって生活してるんですか」
平井 「どうやってって、節約だよ」
内野 「節約だったって、限度があるでしょう」
平井 「限度があったって、それでやってくしかないだろ」
内野 「他の仕事、してないんですか」
平井 「ないんだよ」
内野 「ないって」
平井 「ないんだよ、仕事が他に」
内野 「そんなことないでしょう」
平井 「いや、そりゃ内野くらの年ならいくらだってあるよ。工場だってなんだって、若くて体力あるなら雇ってくれるだろうけどさ、俺はもうなあ」
内野 「だって、社長、高校出てるじゃないですか」
平井 「社長はもうやめてくれよ」
内野 「社長は社長ですよ」
平井 「会社もうないんだから」
内野 「……」
平井 「悪かったと思ってるよ。内野だって、一生懸命やってくれてたのに」
内野 「いや、俺は何もやってないですから」
平井 「そうか、そうだな。二月に見習いに入って、すぐ潰れちゃったんだもんな」
内野 「でも、この仕事、紹介してくれたから」
平井 「ひと月三万六千円だけだな」
内野 「大丈夫です。掛け持ちで、何か他の仕事、探しますから」
平井 「それがさ」
内野 「はい」
平井 「なかなか難しいんだよ」
内野 「え」
平井 「だからほら、調査との掛け持ちがさ、なかなか難しいんだ」
内野 「難しいって」
平井 「三日間の調査の間はさ、出向先の家庭の生活時間が、俺たちの勤務時間なわけだろ

内野 「はい」

平井 「八時起きの家庭もあれば、深夜三時起きの家庭もあるんだよ」

内野 「でも、三日ですよね」

平井 「そう、その三日、よそんちの台所に寝起きして、奥さんが台所に入ってくるたんびに全部の動きをチェックするわけだろ」

内野 「あ、食事の支度のときだけじゃないんですか」

平井 「違う違う、全部だよ全部。お茶淹れたり、猫に餌やったり、酒屋のご用聞きが来たり、そういうのも全部さ、そのシートに書き込むわけ。あ、動線の書き込み方、教わったよな」

内野 「はい。動線は判りますけど、そんな細かい動きまで全部なんですか」

平井 「そうそう、全部」

内野 「それって、」

平井 「なんのためにって思うよな。思うんだよ。でもな、それをやんなきゃいけない」

内野 「まあ、細かい仕事ですけど、それほどしんどいようには思いません」

平井 「だよな。俺もそう思ったんだよ。だけど、案外にしんどいだ、これが」

内野 「だって、夜は普通に眠れるんですよ」

平井 「眠れるよ。台所の床でな」

内野 「帰っちゃダメなんですか」

平井 「うん、帰っちゃだめ」

内野 「寝袋持って行かなきゃ」

平井 「そうね」

内野 「まあ、三日なら辛抱できますよ」

平井 「いや、それが、思うほど単純じゃないからさ」

内野 「なんですか」

平井 「まあ、一度やってみれば内野にもわかると思うからあれだけど、とにかく、他の仕事探すのは、一度やってみて、色々考えてからの方がいいと思うからね」

内野 「はい。じゃあ、そうします」

平井 「台所事情、って良く言うだろ」

内野 「台所事情？」

平井 「なんていうか、裏事情というか、金の出入りだの、そういう他人の目に触れない事

情をさ、台所事情って言うんだよ」

内野 「すみません、中卒なんで」

平井 「いや、だからさ、他人の家の台所に上がり込んで、三日間寝泊まりして、それを目にするってのはさ、まあ、それなりにしんどいこともあってさ」

内野 「ああ、そうかもしれないね」

平井 「うん、まあ、そうなんだよな」

内野 「喋れないですしね」

平井 「喋れない？ ああ、そうそう、喋れない」

内野 「調査の間、喋っていいのはインタビューのときだけですよね」

平井 「うんそう。夕食の後にね、インタビューっていうか、奥さんに質問するときだけね

—

内野 「あなたは今日一日の暮らして、幸せでしたか」

平井 「そうそう、その質問をね」

内野 「え、質問で、これだけですか」

平井 「そう」

内野 「三日間、毎日、この質問するんですか」

平井 「そうだよ」

内野 「……」

平井 「気が重いなだよな、その質問」

内野 「そうですか？」

平井 「だって、旦那に茶碗投げつけられたりして泣きながら洗い物してる奥さんにさ、あなたは今今日一日の暮らして幸せでしたかって、訊けるか」

内野 「……」

平井 「でも、訊かなきゃいけないからさ」

内野 「はい」

平井 「怒鳴りつけられたことあるけどな」

内野 「理不尽ですね」

平井 「だよなあ」

内野 「でも、幸せでしたって答える人も、いるでしょう」

平井 「いるよ。虚ろな目だな」

内野 「きっといますよ。社長も、きっと次の調査家庭では、そういう人に出会えますよ」
平井 「そうだなあ、出会いたいなあ」
内野 「：奥さん、連絡ありましたか」
平井 「いや、ない」
内野 「探したんですよね」
平井 「うん、探した」
内野 「実家とか」
平井 「連絡もないってさ」
内野 「そうですか」
平井 「女房はともかくさ、チビがなあ」
内野 「良太くんでしたっけ：そうですね」
平井 「ま、居場所が判ったからってどうしようもないんだけどさ」
内野 「戻って欲しいって頭下げるつもりなんでしょ」
平井 「まあ、一応、形はな。そうしないと、終わるに終われないしな」
内野 「終わるって、終わらせたくないんじゃないんですか」
平井 「んん？ ああ、まあな」
内野 「じゃあ、やっぱり探し出して頭下げるしかないでしょう」
平井 「ま、もうそれはいいよ。あれだって、辛抱して辛抱してどうしようもなくなっ出てったんだろうし」
内野 「だけど、何も言わずに出て行くなんて、あんまりじゃないですか」
平井 「そういうもんじゃないのかな。そのときにはもう、言う言葉なんてさ」
内野 「僕は納得いかないなあ」
平井 「そもそもさ、女房戻ったって、もう住む家もないんだから、頭の下げようがないよな。頭どころか、それこそ、どのツラ下げてって奴だろ」
内野 「だけど、社長だって頑張ってるじゃないですか」
平井 「だめだめ、俺なんか、自分が生き延びるのがやっとやっただから」
内野 「今は月給三万六千円でも、この先またもつと、」
平井 「またもつと？」
内野 「また…もつと…」
平井 「もうさ、俺はいいんだよ。もつととかまたとか今度こそとか、そういうのは」

内野 「……」

平井 「女房子どもいれば歯食いしばって働くよ。けどさ、」

内野 「すみません」

平井 「んん？ いや、内野が謝ることないだろ」

内野 「……僕にはそういう諦め方、わからないんです」

平井 「だよなあ。わからなくていいよ、まだ二十五だろ」

内野 「何もわからないのに、出過ぎたこと言って、すみません」

平井 「二十五かあ。俺が女房と会った年だ」

内野 「ああ、ジャズ喫茶ですよね」

平井 「そうそう。俺、新宿のジャズ喫茶で働いててさあ、毎日来るなあ、どこのお嬢だろうって気になっててさ。しかも、夕方のちょうど混み合ってる時間に、アイスココアなんて頼むんだ」

音楽と共に女が一人現れる。

と、その空間は新宿のジャズ喫茶。

内野がウェイターとなって女の注文を聞きに行く。

内野 「いらっしやいませ」

女 「アイスココア」

内野 「かしこまりました」

平井は、厨房で珈琲を淹れている。

内野 「アイスココア一つお願いします」

平井 「誰だよ、この忙しいのにそんな面倒なもん頼む奴は」

内野 「すみません」

女、それを聞いて黙って出て行く。

内野 「あ、お客様」

平井、舌打ちして追いかける。

平井 「ちよっと、すみません、お客さん」

女、立ち止まる。

平井 「あ、お急ぎなんですか」

女 「いえ、別に急いでませんけど」

平井 「じゃあ、待っててください、すぐ作りますから、アイスココア」

女 「いいです、忙しいときに面倒でしょう」

平井 「いえ、じゃあ、あの少し待っててくれたら、美味しいの、作りますから」

女 「いいんです。アイスココアは飲みたいけど、別に、どうしてもこの店のってわけじゃないし」

平井 「お願いします」

女、戻って来る。

内野が女にアイスココアを運ぶ。

平井 「かちんときたんだけどさあ、なんか悔しくなっちゃってなあ。生クリームどっさり乗つけて、とっておきのアイスココア、作ったんだ」

女 「おいしい」

平井 「それから、毎日来るんだよ。店が閉まるちょっと前、客が誰もいないような時間に来て、アイスココア頼むんだ。前と違って、遠慮がちな声で、」

女 「アイスココア」

平井 「二週間くらい続いたなあ。それで、俺も勇気を振り絞ってさ、女に良かったら、この後もっと美味しいアイスココアの店に行きませんか」

女 「アイスココアはもういいです」

平井 「あ、じゃあ、えーと、ハンバーガー、嫌いですか。原宿の、オリンピックって店、知

ってますか。ハンバーガーとチョコレートケーキ、奢ります… 内野に）マクドナルドなんてまだなかったからさあ」

内野 「初めての彼女だったんですよね」

平井 「うんそう。初恋じゃないけど、初めての彼女だった。五年付き合ってた、二度子ども堕ろさせて、三〇でやっと結婚して、ようやく子ども生まれられたのは俺が四〇過ぎてからで、最初の子は女の子だったけど、三歳のときに車にはねられて死んだ。どうしようもないことってあるもんだよなあ。子どもをなくした代わりに見たこともないような大金が転がり込んで、俺は会社を興した、そうでもしないと、いつまでも後ろばっかり振り返って人生が立ち行かなくなるって思ったんだ、だけど、女房はそう思ってたなかった」

内野 「でも、良太くんが生まれて、また幸せを取り戻したんですよね」

平井 「……どうだかな。やり直せるんなら、アイスココアからやり直したいよ」

女 「アイスココア……飲みます？」

数日後、平井が調査することになった持丸家の居間。

内野はいなくなっている。

女は、持丸家の主婦・千絵。

平井 「いや、お構いなく。今日は、調査のための契約書一式にお目通し戴いて、判子押ししてもらっただけですから」

千絵 「はい。じゃあ、えーと、判子」

平井 「ええ、ここに、ご署名と判子を」

千絵 「あ、主人の名前かしら」

平井 「いえ、奥様のお名前です」

千絵 「あの、ここ、書いてないんですけど、カラーテレビ、貰えるんですよね」

平井 「あ、そうです、そうです、調査にご協力戴いた御礼として、新品のカラーテレビを差し上げてます。こちらに、そのチラシが」

千絵 「うわあ、ほんとだ。カラーテレビ…太っ腹ですよねえ」

平井 「おかげさまで、大好評でございます」

千絵 「いつですか」

平井 「はい」

千絵 「いつ、テレビ貰えるんですか」

平井 「ええと、三日間の調査が終了しまして、私が提出したレポートに不正がないことが確認されましたら、発送の手続きに入らせて戴くことになります」

千絵 「不正？ 不正ってなんですか」

平井 「ええ、つまり、規約違反でことですか。こちらの契約書にあります違反事項が一つでもありますと、不正とされてレポートがデータとして受け取られないんです。そうしますと、調査はしたけどテレビが貰えないということになります」

千絵 「そうなんですか」

平井 「まあ、違反事項は主に虚偽の申告ですね。調査対象の条件として挙げられている家族構成、間取り、食事回数、平均的な食費などをごまかしちゃいかんということと

調査員である我々が、実際に目視していないようなことを報告しちゃいかんということ、及び、調査員が認識したご家庭での出来事に対してありのままに報告せにゃいかん、ということですよ」

千絵 「結構厳しいんですね」

平井 「実際、カラーテレビ目当てで嘘の申告をするような人もいますんでね」

千絵 「嘘の申込、ですか」

平井 「ほら、ご夫婦二人住まい、もしくは未成年の子二人までが夫婦と同居する家庭、という条件があるところ、お姑さんがいるのに隠してたりとか」

千絵 「お姑さん隠すんですか、押し入れとかに？」

平井 「いやいや、温泉旅行に行かせたりするんですよ。最初は気づかなかったんですけどね。お姑さんが旅行先で足を挫いたって連絡が入って大騒ぎになって」

千絵 「なるほどねえ。隠すのにも工夫がいますよね。押し入れに入れておけば良かったのにねえ」

平井 「いやいや、押し入れじゃ」

千絵 「そうか、庭の物置の方がいいですよね」

平井 「お姑さんがいらっしやるんですか」

千絵 「いません、いません、主人もいませんから」

平井 「は？」

千絵 「いえ」

平井 「いや、ご主人はいらっしやるんですよね」

千絵 「ああ、はいはい、います、いますけど、今は、いないんです」

平井 「いらっしやるらないんですか」

千絵 「いえ、今というか、居間にはいないです」

平井 「どちらにいらっしやるんですか」

千絵 「さあ」

平井 「さあ？」

千絵 「どこにいるんでしょうか」

平井 「いや、もしね、明日からの三日間、ご主人がご不在でしたら、これはもう調査を中止ということになりますんでね」

千絵 「そういうご家庭もあるんでしょうか」

平井 「まあ、私が担当したご家庭ではありませんでしたけれども、たまたまご主人の出張が重なった場合なんかでも、調査は中止しなければならいんですよ。調査とはいえ、奥様一人のご家庭に調査員が三日も泊まり込むなんてことになる、これはもう社会的に大問題になりますんでね」

千絵 「社会的に大問題ですか」

平井 「そりゃそうです」

千絵 「下宿と思ったらどうでしょう」

平井 「は？」

千絵 「そうですよ、ほら、下宿。それならいいでしょう」

平井 「いや、それじゃあ調査にならないんで」

千絵 「厳しいわあ」

平井 「持丸さん、どうか正直に仰ってください。ご主人いらっしやるんですよね」

千絵 「いますよ」

平井 「お姑さんは同居されてないんですよね」

千絵 「姑は広島です」

平井 「間違いないですか」

千絵 「間違いないですよ。温泉旅行かもしれませんが、なんなら広島、電話してみましようか」

平井 「いえいえ、結構です。こちらのご家庭のお申し込みに虚偽がなければいいんです」

千絵、急に立ち上がって出て行く。

平井、疑わしい気持ちで部屋の中を見渡し、押し入れを開けてみる。

千絵がアイスココアを持って戻る。

千絵 「どうぞ」

平井 「ああ、すいませんどうも、もうお構いなく」

千絵 「どうしてそんなに条件に厳しいんですか」

平井 「ああ、まあ、そもそもこの調査の目的は商品開発なんですがね、今、家庭の主婦がどのような製品を必要としているか、それを知りたいわけです。お姑さんのおられる家庭では知恵や工夫が行き届いているし、ご主人のおられない家庭では奥様方も手抜きをする。大家族となれば台所で立ち働くのが奥様だけではなかったりもする

。そうしたところで一番真面目に台所仕事をしているであろう核家族の主婦に対象を絞って、あらゆる家庭の台所で本当に必要とされる製品を開発したい、というのが当社の考えなわけです」

千絵 「当社って、あなたはその会社の人ではないんですよね」

平井 「ああ、はい、失礼しました。私はこの製薬会社から調査を委託されたりサーチ会社のものですから」

千絵 「ずいぶん上の方が現場に出向かれるんですね」

平井 「いや、上じゃありません。ただのバイトです」

千絵 「バイトなんですか」

平井 「まあ、今回の調査は全国的な規模でやっておりますんでね、人手が足りなくて、私のような年寄りにも働き口が回ってくるんです」

千絵 「私にもできるかしら」

平井 「は？」

千絵 「その、調査員のお仕事、まだ募集してますか」

平井 「調査員ですか、さあ、もしかしたら若干の募集があるかもしれませんが」

千絵 「若干かあ」

平井 「奥様が応募されるんですか」

千絵 「若干じゃきつとダメですね。私、昔から並べられて選ばれるっていうのに弱くて、そういうとき必ず弾かれるんです」

平井 「いや、でもどうして働く必要があるんですか。ええと、ご主人は確か、セールスのお仕事でしたか」

千絵 「ブリタニカです」

平井 「ああ、百科事典の」

千絵 「はい、ブリタニカ」

平井 「じゃあ出張も多いんでしょう」

千絵 「いえ、全然」

平井 「あ、全然」

千絵 「全然、売れないんです」

平井 「…それで、奥様が働こうと」

千絵 「……」

平井 「いや、失礼しました。つい立ち入ったことをお伺いしてしまいすみません。明日からは一日の最後の質問以外は一切、口を利きませんので、どうか安心して、奥様はいつも通りにしてください」

千絵 「泥棒とか」

平井 「は」

千絵 「泥棒とか入ったら、どうするんですか。契約書にはなかったと思いますけど」

平井 「泥棒ですか」

千絵 「そうですよ。泥棒が、勝手口から入ってきてても、ドロボー！って叫んだりしないんですか」

平井 「ははあ、泥棒…ちょっと、社に確認しておきます」

千絵 「火事はどうするんですか」

平井 「火事」

千絵 「天ぷらしてるときに電話かかってきたりして、油に火がついても黙ってるんですか」

平井 「いや、そりゃまあ、そのときには叫びますよ、火事だー！って」

千絵 「でも、泥棒は叫ばないんだ」

平井 「いやいや、叫びます、叫びます」
千絵 「柵はどうですか」
平井 「柵、ですか？」
千絵 「台所に、高い柵があるんです」
平井 「はあ」
千絵 「そこに、蒸し器とか、お重とか、あんまり使わないものが置いてあるんです」
平井 「はあ」
千絵 「わたし、届かないんです」
平井 「ええ」
千絵 「そういうの、取ってくれないんですか」
平井 「ああ、柵ねえ、ううん、それはちよっとねえ…いつもどうされてるんです？ その柵のものを取るときには」
千絵 「主人に頼んでいました」
平井 「ああ、じゃあ、いつもと同じようにして下さい」
千絵 「……」
平井 「ええと、他にご質問は」
千絵 「魚はどうしたらいいんですか」
平井 「魚、というと」
千絵 「わたし、魚触れないんです」
平井 「はあ」
千絵 「でも、煮付けが大好きなんです。金目鯛とかカレイとかブリとか」
平井 「いやあ、いいですねえ、ブリ大根、大好物ですよ」
千絵 「でも触れないんです」
平井 「ああ、ええと、それじゃあ、いつもは」
千絵 「主人が捌いてくれました。わたし、切り身なら触れますから」
平井 「ああ、じゃあ、まあそれも、いつもと同じようにされたらいいと思いますが」
千絵 「電球も切れそうなんです」
平井 「電球」
千絵 「今朝じじって言ってたから、多分、明日の夜くらいに切れちゃうと思います」
平井 「ああ」

千絵 「わたし、」

平井 「届かないんですね」

千絵 「そうです」

平井 「……替えましょうか」

千絵 「え」

平井 「替えの電球ありますかね。あるんなら、今、替えておきますよ」

千絵 「替えてくれるんですか」

平井 「いいですよ。明日からは調査なんで、調査中にそれができるかどうかは、ちょっとね、あれですから。でも、今日は事前面談なんで構わないでしょう」

千絵 「じゃあ、お願いします」

二人、立ち上がって台所へ行く。

入れ替わりに、内野と、吉田が入ってくる。

空間は、内野が調査することになった吉田家の台所。

吉田 「ああそう、じゃあ、内野くんは、今回が調査デビューなんだ」

内野 「はい。よろしくお願いします」

吉田 「実は俺さ、三ヶ月前に一回、この調査受けてるのよ」

内野 「えっ、そうなんですか」

吉田 「そうそう、前の女房と暮らしてたときね」

内野 「あ、再婚されてるんですね」

吉田 「再婚したばかり。いわば新婚なんだけど、再婚だと新婚って言わないよね」

内野 「聞いたことないですね」

吉田 「だよ。でも今の女房とは先月入籍したばかり」

内野 「それは、おめでとございます」

吉田 「ありがとうございます」

内野 「あの、同じ世帯に二度調査が入るのは、ちょっとまずいんですけど」

吉田 「うん、知ってる知ってる。最初るとき、じっくり契約書読んでるからさ」

内野 「はあ」

吉田 「だから、大丈夫って確信して、また応募したの」

内野 「え、ほんとに大丈夫なんですか」

吉田 「だって、前の調査のときは、女房が応募したんだもん。で、今回は今の女房が応募したわけ。つまり、俺はどつちも直接調査されてるわけじゃないから、ぜんぜん問題なし」

内野 「あ、そうですか。それなら」

吉田 「ところがさあ、内野くん、ちょっと相談なんだけど、実はね」

内野 「はい」

吉田 「うちが選ばれたって連絡もらった次の日にさ、女房がちょっと体調崩しちゃったのよ」

内野 「はい」

吉田 「今日も検査に行つて、まだ帰ってないんだけどさ」

内野 「はい」

吉田 「さっき連絡あつて、実は、明日の朝から入院して、手術するらしいんだよね」

内野 「え、手術ですか」

吉田 「そうなんだよ」

内野 「大変ですね」

吉田 「ほんとにね、急だから、困っちゃつてさ」

内野 「じゃあ、調査はキャンセルということにした方がいいんですよね」

吉田 「そこそこ、そこが相談なんだよね」

内野 「いや、でも、ご夫婦揃つてご在宅ということでないと規定違反になるんです」

吉田 「わかつてるって。だから、相談って言ってるんじゃない」

内野 「どういう相談ですか」

吉田 「俺がさ、主婦つてことでもいいじゃない」

内野 「え、ご主人が主婦ですか」

吉田 「そうだよ。だって、調査つたつて、あれだよね、台所で何作つた、どう動いたつて

あの矢印みたいな線をぐるぐる書き込むだけでしょ、ちゃんと台所使つてれば誰が動いてたつて変わりないじゃない。調査、やっちゃおうよ」

内野 「でも」

吉田 「キャンセルになつちゃうと、女房ががっかりするからさ。さっきの電話でもすぐく

気にしてたんだよ」

内野 「いや、それはなんというか、ありがたいことです」

吉田 「あれだろ、内野くんだって、うちの調査がキャンセルになったら、また次に他のうちに行つて、今日と同じ説明しなきゃいけないんだろ」

内野 「はあ、まあ、多分そうだと思います」

吉田 「ああ、そうか、内野くん今日がデビューだもんな、知らないよな」

内野 「はい」

吉田 「次の調査まで結構待たされたりするらしいよ。その間、給料貰えなくなるんじゃないの。あ、なんかキャンセル出ると、調査員に罰金払わせるらしいって聞いたことあるけどな」

内野 「え、罰金ですか」

吉田 「そうそう、罰金、かかるらしいよ。前の調査のときに、なんかそんな話聞いたなあ

」

内野 「知りませんでした」

吉田 「そりゃ会社は教えないよ。そんなこと言ったら、みんなキャンセルにならないようズルしちゃうに決まってるんだから」

内野 「はあ、そうですよね」

吉田 「テレビ、一番新しいソニーのトリニトロンだろ、レンズがでかいやつ」

内野 「あ、はい」

吉田 「あれ、いくらするか知ってる？」

内野 「ええと、十万くらいでしたっけ」

吉田 「十四万八千八百円」

内野 「高いなあ」

吉田 「高いよなあ」

内野 「どうせ僕の四畳半にはテレビなんか置けませんけどね」

吉田 「うちも、うちも。今どきまだちっちゃい白黒テレビだから」

内野 「応募が殺到するわけですよね」

吉田 「だろ。どうしても欲しいだよ、カラーテレビ。だからさ、内野くん、協力してくれたら、ボーナスあげる」

内野 「えっ」

吉田 「内野くんが協力してくれたら、うちはカラーテレビ貰えて女房も喜ぶしき、内野くんは罰金払わずにちゃちゃっと仕事終わらせておまけにボーナスなんだから、悪い話じゃないと思うけど」

内野 「でも、バレたらクビなんで」

吉田 「どうやってバレるの、俺たちが黙ってれば誰にもわかんないじゃない」

内野 「まずいですよ。このバイト、世話になってる人の紹介だし」

吉田 「だから、絶対バレないよう協力し合おうよ」

内野 「いや、吉田さん、それはやっぱりまずいですよ」

吉田 「じゃあさ、うちにトリニトロン届いたら、今ある白黒テレビ、内野くんにあげるよ」

「

内野 「えええっ」

吉田 「ないんだろ、テレビ」

内野 「ないです」

吉田 「あげるよ、うちトリニトロンあれば充分だもん。ね、白黒テレビとボーナスで、どう？」

内野 「ボーナス…って、いくらですか」

吉田 「二万円」

内野 「二万円ですか」

吉田 「だって、うちにしてみたら二万円でトリニトロン買えるみたいな話じゃない、安いもんだよ」

内野 「二万五千円」

吉田 「…足元見るねえ」

吉田と内野、合意に達した様子で去る。

平井と千絵がくる。

再び、持丸家。

千絵 「足元見てないんだもの」

平井 「いや、見てましたって。ちゃんと見て、届くなって思ったら届かなかった」

千絵 「じゃあ、きっと自分で思ってるより実際は足が短いんですね」

平井 「ひどいなあ」

千絵 「だって、漫画みたいにずっこけるんだもの」

平井 「いやいや、驚かせてすいません」

千絵 「でも、電球も替えてもらったし、蒸し器も下ろしてもらったし、どうもありがとうございます」

平井 「まあ、じゃあ、今日のところはこれで大丈夫ですね。明日からは、まあいつも通りに動いて戴ければ」

千絵 「……」

平井 「朝は、何時に起きられますか」

千絵 「え？」

平井 「朝です、朝。ご主人の出勤は」

千絵 「ああ……ええと、わたしはいつも六時に起きていました」

平井 「じゃあ、朝早くて申し訳ないんですが、六時ちょうどに来ますので、よろしくお願
いします」

千絵 「七時でもいいです」

平井 「えっ」

千絵 「六時なんて早いでしょう。七時でいいですよ」

平井 「いや、奥様が起きて台所に入られる時間から調査したいんでね」

千絵 「じゃあわたし、七時に起きますから、七時にしましょう。七時に来てください」

平井 「……奥さん」

千絵 「あっ、八時でもいいです」

平井 「奥さん、ご主人は何時にご出勤ですか」

千絵 「えっ」

平井 「ご主人は、何時に出勤されるんですか」

千絵 「……」

平井 「奥さん」

千絵 「……いないんです」

平井 「えっ」

千絵 「主人、いないんです。昨日から」

平井 「いないってのは、出張かなんかですか」

千絵 「出てったんです」

平井 「出てった、とは」

千絵 「うちの人、他に女がいるんです」

泣き崩れる女。

暗転。

テレビから流れるノイズ音。

明るくなると、男・持丸睦雄が、イライラした様子で白黒テレビを叩いている。

持丸家、数日前。

睦雄 「…つたくよお」

テレビ、何も映さない。

睦雄 「千絵、おい、千絵」

千絵 「(声) はいー」

千絵が来る。

睦雄 「だめだ、こりゃ」

千絵 「あ、テレビ、もうだめ(みたいなもの)」

睦雄 「だめみたいじゃないよ。電気屋呼べよ」

千絵 「ごめん、今月あんまり余裕なかったから」

睦雄 「お前さあ、俺がうち帰ってきて、他になんか楽しみあると思う？」

千絵 「うん、睦雄くんテレビ好きだよね」

睦雄 「バカか、お前。バカにしてんのか。俺はな、テレビが好きなんじゃないんだよ、帰

つて来ても他になんにも楽しみがないから、仕方なくテレビつけてんだよ」

千絵 「そうか、そうだったんだ。テレビ好きなんだと思ってた」

睦雄 「ばか」

千絵 「ごめん」

睦雄 「お前、ほんとバカだな」

千絵 「ごめん、明日、電気屋さん来てもらおうから」

睦雄 「あれどうしたんだよ」

千絵 「あれって」

睦雄 「あれだよ、あれ。ほら、トリニトロン当たるやつ、送れって言っただろ」

千絵 「あ、ああ、あれ、送ったよ。そうだ、それで、明日、係の人くるって連絡あったんだ」

睦雄 「うっそ」

千絵 「うん、今日、電話かかってきた」

睦雄 「やったじゃん、すげえじゃん、それって当たりだろ」

千絵 「う、当たり前って言うか、まあ一応調査対象に選ばれましたって」

睦雄 「すげえじゃん、それ、当たり前だ、当たり前」

千絵 「うん、そうだね」

睦雄 「なんだよ、じゃあいらねえじゃん、これ」

千絵 「でも、トリニトロン貰えるの、まだ先だよ、きっと」

睦雄 「なにそれ、なんで」

千絵 「えっと、だから、トリニトロンは当たるっていうか、調査に協力した御礼として貰えるらしいから、調査が終わってからなんじゃないかなあと思って」

睦雄 「はあ？ 調査？ なにそれ調査って」

千絵 「なんかね、家庭の主婦の台所活動に関する調査」

睦雄 「関するとかってそういう言い方やめろって」

千絵 「うん、なんか、そういうの」

睦雄 「で」

千絵 「で、って？」

睦雄 「だからなに」

千絵 「え」

睦雄 「だからなんなんだよ」

千絵 「あ、だから、そのテレビ、やっぱり直して貰った方がいいかなあって」

睦雄 「バカじゃねえの、お前。トリニトロン当たったのに、なんでこんなボロいテレビいるんだよ、普通捨てない？」

千絵 「そうだよ、もう捨てちゃオツかなあと思ってるんだけど、でもさ、トリニトロン貰えるの、多分もうちょっと先だから」

睦雄 「はあ？」

千絵 「だから、それまでは、そのテレビを直して使ったらいいかなあって」

睦雄 「だから、捨てんだろ、これ」

千絵 「うん」

睦雄 「捨てるもん金払って直すなんて、バカかっつってんだよ」

千絵 「うん、そうなんだけど」

睦雄 「けど、なに」

千絵 「うん」

睦雄 「けどなんだよ」

千絵 「ううん」

睦雄 「ううんじゃねえだろ、そうなんだけどの【けど】の先はなんなんだって訊いてんだよ」

千絵 「ごめんなさい」

睦雄 「…うざっ」

千絵 「…ごめんなさい」

睦雄 「ああ、もう、うざっ」

千絵 「……」

睦雄、荒々しく出かける素振り。

千絵 「あ、パチンコ？」

睦雄 「ちがう」

千絵 「麻雀はもう、」

睦雄 「女だよ」

千絵 「えっ」

睦雄 「女。俺さ、女いるんだよ」

千絵 「うそだ」

睦雄 「うそだってなに。お前、バカにしてんの、俺にそんな甲斐性ないって？」

千絵 「だって」

睦雄 「いるんだよ、女。俺に惚れてんだよ」

千絵 「わかった」

睦雄 「はあ？」

千絵 「わかったよ。いいよ、行っても」

睦雄 「行くよ。言われなくても行くって。なにお前、何様？なんでいちいちお前の許可がいるわけ？お前、関係ねえし。俺が行きたきゃ行くし」

千絵 「わかってる」

睦雄 「…わかってねえよ」

千絵 「わかってるよ」

睦雄 「……」

千絵、睦雄の身支度を手伝う。

睦雄 「捨てとけよ、それ。なんでもかんでも勿体ないってクズみたいなもん家の中溜め込みやがって、貧乏くせえったらさあ」

千絵 「…ご飯、食べてく？」

睦雄 「いらねえよ」

千絵 「じゃあ、お弁当にしようか？女と食べる？」

睦雄 「いらねえつつつてんだよ」

千絵 「わかった」

睦雄 「女んとこさあ、テレビあんだよ。東芝ブライトロン二十型」

千絵 「…二十型、すごいね」

睦雄 「だろ」

千絵 「いいな」

睦雄 「だろ。俺、女んとこでテレビ見てっからさ。トリニトロン届いたら会社電話して」

千絵 「…うん。いってらっしゃい」

睦雄 「……いってきます」

睦雄、出て行く。

暗転。

持丸家。

平井 「おはようございます」

明るくなると布団を背負った平井が玄関先で棒立ちしている。
その前で頭を下げている千絵。

千絵 「ありがとうございます、本当に、ありがとうございます」

平井 「しょうがないでしょう、判子貰っちゃったし、書類破棄するの、会社うるさいからねえ。こんなの、例外ですよ」

千絵 「ほんとにすみません」

平井 「ちゃんと、ご主人がいるときと同じように振る舞ってくださいよ」

千絵 「わかりました、頑張ります」

平井 「じゃあ、台所に入りますんで、これからはこちらを気にしないで、話しかけたりしないようにして」

千絵 「はい」

平井、上がり込んで、台所の隅に布団を置いて、その上に座る。

千絵 「あ、なんか馴染むんですね、普通に」

平井 「……」

答えずに、書類を出して、調査の準備を整える平井。

千絵 「貧乏神みたい」

平井 「……」

不愉快そうに顔をしかめて、千絵に動きを促す。

千絵 「あ、そっか。えーと……お湯、湧かします……で、そうそう、その間に新聞を取ってきて、取りに行く、その間にヤカンが笛を吹く……あ、お茶、お茶……うわ、お茶ッ葉切れてた……じゃあ、白湯だけど、お茶のつもりで……あ、茶柱……なんちゃって……あ、睦雄くん、もう起きたの？」

千絵の演技に、平井、一瞬ぎよっとして振り向くが、睦雄はいない。

千絵 「ご飯、すぐできるよ。新聞、そこにあるから。ゆっくり眠れた？ 今日も一日歩くんだもんね。おつかれさま。……わたし？ わたしは今日は、駅前で買物、トイレットパーパーと、お醤油と、お茶ッ葉……あ、ねえ、こないだの柏餅、美味しかったねえ、また買ってこようか。きんつばも美味しそうだったけど、どっちがいい？……わかった、じゃあ今日はきんつば買って来る……あ、そっか、きんつばと柏餅、一個ずつにすればいいんだ、それで半分こしよう……ええー、そんなのため、睦雄くんに食べて欲しいんだもん、半分こにしようよ」

平井、呆れた様子で千絵の一人芝居を眺め、用紙に動線を書き込んでいく。

千絵、ふっと虚しくなるが、気を取り直して、演技を続ける。

千絵 「あ、ねえねえ、睦雄くん、今度の日曜さ、映画行こうよ、**アメリカン・グラフィティ**【観たいんだ、やだやだ、だって、恐いんでしょう？ **エクソシスト**】、恐いの苦手って知ってるじゃない。もう、意地悪なんだから……はい、ハムエッグ、どうぞ。お味噌汁は大根とお揚げさん」

誰もいない食卓に、湯気の立つ料理が並ぶ。

平井、覗き込んでメニューを書き込む。

千絵 「……どうぞ」

平井、黙って布団に戻る。

千絵 「……冷めちゃうから、どうぞ」

平井、自分に言われていると気づいて、かぶりを振る。

千絵 「食べてください、だって、食べてくれる人、誰もいないんだから」

平井、困惑している。

千絵 「やっぱり、こんなの無理です。ばかみたい」

平井、ため息。

千絵 「食べてくれないなら、捨てます」

千絵が伸ばした手を押しとどめて、

平井 「食べます。……いただきます」

平井、皿を持って布団に座り、黙々と食べる。

千絵 「白湯でいいですか、お茶、切らしちゃって」

平井 「…… 会釈する」

千絵 「お茶、のつもりで、お茶のふりしてくださいね」

平井 「……お、茶柱」

にこつと微笑む千絵。

暗転。

公園、深夜。

平井が、ぶつぶつ言いながら偽の報告書を書いている。

平井 「ええと…旦那が午後六時に帰宅、ああー、晩酌、いや、風呂が先か…ええと、奥さんは洗い物…違うな、夕飯作ってんだ…夕飯作ってて、手をとめて、風呂の湯を出しに行つて、戻つて、炊飯器のスイッチいれて……んん？ 飯は、今朝炊いたんだっけ？」

内野が、缶ビールを二本持つてくる。

内野 「おつかれさまです」

平井、報告書を慌てて隠す。

平井 「ああ、おつかれさまです」

内野、缶ビールを平井に差し出す。

平井、しげしげ眺める。

平井 「便利なもんだよなあ」

内野 「え、何がですか」

平井 「いや、これさ。この蓋ね。今はワンタッチで開くじゃない。そうすると、こんなふうに公園で飲めるんだよなあ」

内野 「ええ？ 缶ビールなんて、僕が子どもの頃からありましたよ」

平井 「いや、そうそう。あるにはあったんだけどね、この蓋がさ、ちよつと前までは、ほら、缶切りで開けなきゃならなかったわけよ」

内野 「へえ、そうなんですか」

平井 「そうそう、そうなんだよ」

内野 「それは、ちよつと面倒ですよね」

平井 「面倒っていうか、あんまり意味ないじゃない？ 缶切りなんて持ち歩かないだろ、普通。結局、瓶ビール、うちとか、そのへんのスナックで飲むんだよなあ」

内野 「うちのオヤジ、よく近所の酒屋で立ち飲みしてましたよ」

平井 「柿の種とか、ツマミ買ってな。あれ、安上がりでいいんだよ。スナックなんて高くつくだろ、ちよつとビール飲みたいだけなのに、千円とか、二千円とかさ…あ、これ、いくら？」

内野 「いや、いいですよ」

平井 「いいって。いくら」

内野 「百五十円です」

平井、ポケットから小銭を出して内野に支払う。

内野 「あ、すみません…なんか、社長、今日、機嫌いいですね」

平井 「え？ そう？」

内野 「ええ、なんか」

平井 「そうか？ そうか…」

内野 「なんですか」

平井 「いや、別に…で、内野くんの方はどうなの」

内野 「えっ、あ、まあ、順調です」

平井 「問題なさそう？」

内野 「ないです、ないです」

平井 「あっそう」

内野 「あの、問題って、たとえば」

平井 「いや、別に、たとえばってことないけど」

内野 「……」

平井 「……」

内野 「じゃあ、そろそろ」

平井 「そうだな。そっち、朝、早いのか」

内野 「えっ、ええ、まあ」

平井 「そうか。がんばれよ」

内野 「はい、社長も」

平井 「おう、じゃあな」

内野 「おやすみなさい」

平井 「おやすみ」

内野と平井、それぞれ別の方向へ去る。
暗転。

吉田家。

薄暗い台所に、内野がそうっと戻ってくる。

吉田 「おかえり」

驚く内野。見ると、吉田が布団の上に座っている。

内野 「あ……」

吉田 「この時間でも、やっぱり口利いちやダメなの？」

内野 「えと…多分」

吉田 「そうか、じゃあしょうがないね。返事しないでいいからさ、俺、話してもいいかな」

内野 「……はあ」

吉田 「女房さ、ガンなんだ」

内野 「……」

吉田 「もう、あちこちに転移してて、手遅れなんだって」

内野 「……」

吉田 「手術で開けて視たら、もうどうしようもなかったって」

内野 「……」

吉田 「ごめんね、内野くん。女房が欲しかったテレビの為に、せっかく協力してくれてるのに、もしかしたら調査が終わるまで、あいつ、もたないかもしれないよ」

吉田、泣いている。

吉田 「人生つてき、うまくできてるよね。どっかでちゃんと帳尻が合うんだよね。俺さ、再婚じゃない。前の女房にはほんとひどいことしたからさ、それでも、心入れ替えで、今度の女房は幸せにしてやろうって、前の女房が、わたしたち別れてよかった

あんたもやっとまともな男になった、って言ってくれるように、今度の女房は大事

にしようって決めてたんだよ。それなのに、俺より先に逝っちゃうなんてさ、うま
くないもんだね」

内野 「……」

吉田 「内野くん、調査、もう終わりにしていいからね。だって、女房いなくなるのに、で
っかいカラーテレビなんてあったって、しょうがないもんね。テレビだの全自動洗
濯機だの、冷凍冷蔵庫だのさ、新しいもん、欲しいもん、たくさんあってさ、女は
そういうの欲しがるでしょ、買ってやりや喜ぶよね。でもさ、そんなもんがずらっ
と家の中に揃ってたってさ、女房いないんじや、しょうがないよね……今日一日だ
けだったけど、内野くん、ほんとありがとだね。いてくれて、気が紛れた。紛れた
っていうか、慰められたっていうか、嬉しかったんだよ。誰か一緒にいてくれてさ

。だ
だって、内野くん、俺の息子みたいな年だろ、俺、子どもいないんだ。昔はひどい
不良だったからさ、若かったんだよなあ、夢もあったしき、子どもなんかいらな
いと思っ、パイプカットの手術、受けちゃったんだ。神様に背くようなこと、する
もんじゃないね。後悔したよ。この年になって、子ども欲しくてさ。前の女房とは
いっつもそれで大喧嘩になったんだよ。でき、今度の女房は、俺のそれ、赦してく
れてるの。孤児院から養子もらってもいいじゃないなんて言ってくれたの。俺、
そうしなかったなあ。子どももらったら、大事に育てるよ。内野くんみたいな優し
い男に育ててさあ、いつか一緒に酒飲みに行つてさあ、女房が怒るだろうなあ、悪
い遊び教えないで！なんてさあ、そういうの、やりたかったなあ」

内野、黙って台所に立って、押すだけの電気ポットからお茶を淹れる。

吉田 「明日さ、俺、起きるの恐いんだよ。だからさ、内野くん、朝、挨拶とかいいから、
出てっついていいよ。もしあれだったら、今夜もう行っちゃってもいいからね。ごめん
ね。無駄な時間使わせて。ズルまでさせちゃってさ。あ、ボーナスはちゃんと用意
してるから、ほら、これ、受け取って」

吉田、茶封筒を内野に差し出す。

内野、黙って吉田にお茶を出す。

吉田 「テレビもね、あげるからさ。持って行くの、大変だろうけど、そんなに大きなあれじゃないから、がんばって運んでよ」

内野 「……」

吉田 「……いいねえ。内野くんの、その無口なところ、優しいなあと思うよ。俺、お喋りだからなあ、男らしくないっていつも女房に笑われてたんだ……男は黙ってサッポロビールだもんねえ、健さんとかさあ、かっこいいもんなあ、**【義なき闘い】**、好き？」

内野 「……」

吉田 「俺、大好き、**【義なき闘い】**、不良だった頃のさ、面倒みてくれてた兄貴分、ち

よっただけ似てるんだよ。でもさあ、ヤクザはもう流行らないよね、かっこよく見えるのなんて映画だけ。今はもうやっぱりさ、みんな腰落ち着けて、幸せな家庭築いて、地味に平凡生きてくのが一番だね。そりゃさあ、金は欲しいよ。女房喜ばせるのに、あれこれ買ってやりたいもん。でもさ、きっと、ほんとはそうじゃないよね」

内野 「……」

吉田 「ほんとは、そうじゃないんだよ」

二人、静かにお茶を啜る。

内野 「吉田さん」

吉田 「うん？」

内野 「今日一日、あなたは幸せでしたか？」

暗転。

持丸家、調査二日目の昼。

千絵と平井、食卓で向き合って、ラーメンを啜っている。

テーブルの上に調査表。

平井 「そんじゃ、朝は、えーと…」

千絵 「ご飯と、鰹の開き」

平井 「鰹の開きね」

千絵 「あと、ほうれん草のお浸し」

平井 「朝から作る？ そんなもの」

千絵 「ううん…」

平井 「納豆とかでいいよ。妙に気取った感じにすると、あれだから」

千絵 「だったら、昨日と同じでも良くない？」

平井 「昨日と同じ…ええと、ハムエッグ、うん」

千絵 「昨日の夕飯、何にした？」

平井 「昨日は、昨日はえーと、カレーライス」

千絵 「へいぼーん」

平井 「そんなもんだろ」

千絵 「そうか、そんなもんか」

平井 「だけど、奥さん、あれ？ほんとにいつもそんなに小食なの？」

千絵 「ううん、うちの人がいないと、どうしてもね」

平井 「だって、今日だって、起きてからこれが最初の食事だよね」

千絵 「うん」

平井 「身体によくないよ」

千絵 「でも、一人じゃ作る気なくなっちゃうし」

平井 「俺がいるじゃない」

千絵 「…平井さんは、どうして奥さん出てっちゃったの？」

平井 「…ううん、どうしてかな」

千絵 「その、会社が倒産しちゃったから？」

平井 「うん…まあ、そうかもしれないし」

千絵 「なんの会社？」

平井 「ん？ ああ、ジュース」
千絵 「ジュース？ 飲むジュース？」
平井 「そうそう、粉末のね、水と混ぜるだけって奴」
千絵 「そういえば、最近ないよねえ」
平井 「そうね」
千絵 「だって、今、コーラだって、ハイシーだって、おいしいのあるもんね」
平井 「そうねえ」
千絵 「そっか、ジュースか。子どもの頃は、大好きだったけど」
平井 「ああ、そう？」
千絵 「うん。ベロが緑色になるんだよね」
平井 「メロン味ね」
千絵 「よく友達とベロの見せっこしてね」
平井 「合成の着色料とか、ふんだんに使ってたからなあ」
千絵 「そうそう、新聞で読んだ」
平井 「森永のさ、ヒ素ミルクって騒ぎになって、みんな怖がっちゃってさ」
千絵 「ああ、そうか。そうなんだ」
平井 「ま、粉末ジュースも、身体にいいもんじゃないからね」
千絵 「そう」
平井 「研究したんだけどねえ、ビタミン混ぜたらどうかとか」
千絵 「ビタミン？」
平井 「ま、単純に資金繰りがね」
千絵 「ふうん、大変なんだねえ」
平井 「うまくいってるやつは、うまくいってるんだけどなあ、俺はどうもそういうところ、波に乗れなくてさ」
千絵 「ねえ、平井さん、古いもの大事にする人じゃない？」
平井 「古いもの？ 古いものって？」
千絵 「わたしね、なんか捨てられないの。壊れた玩具とか、サイズが合わなくなったスカートとか、クッキーの入ってた缶とか、そういうの」
平井 「ああ、俺もそうかもなあ。自転車なんて、もうホイールまがって乗れないのに、ずっとそのまんまだからなあ」

千絵 「直さないの？」

平井 「直さない」

千絵 「なんで」

平井 「なんでって、直すとか、そういうことじゃないんだよなあ」

千絵 「やっぱり。わたしもそう思う。直すとかそういうことじゃないって」

平井 「まあ、直せばいいんだけどさあ」

千絵 「使えるとか、使えないとかじゃないじゃない」

平井 「そうそう、そうなんだよね」

千絵 「すごい苦しんでる病氣の人、直して活かし続けるより、逝かせてあげればいいの
にって」

平井 「そうね、痛いのが消えてなくなるんならともかくね」

千絵 「そうだよ、痛いけど死なないなんて、生きてくの辛いじゃない」

平井 「でもさ、それなら、壊れたものも捨てればいいじゃない」

千絵 「そうか、そうだね、でも捨てられない」

平井 「捨てられないなあ」

千絵 「なんでだろう」

平井 「なんでだろうなあ」

千絵 「……寂しがりなのかな」

平井 「ああ……」

千絵 「……寂しがりなんだね」

平井 「うん……」

千絵 「あ、もう明日で終わりですね、調査」

千絵、食べ終えたラーメンのどんぶりを片付ける。

平井、その動線を書き込む。

千絵 「平井さん、ずっといればいいのに」

暗転。

持丸家、調査三日目の朝。

ラジオから天気予報が流れている。

台所で朝食の支度をしている千絵。

平井は食卓について、納豆をかき混ぜている。

千絵 「ねえ、納豆てき、どうしてヒキワリの方が臭いんだろ」

平井 「んん？ そうか？」

平井、手にしている小鉢に鼻を近づけて匂いを嗅ぐ。

千絵 「臭くない？ ヒキワリ」

平井 「納豆はみんな臭いだろ」

千絵 「いや、絶対、ヒキワリの方が臭うって」

平井 「同じだよ」

平井、笑っている。

千絵 「……」

玄関で物音がして、千絵が顔を向ける。

平井、気づかない。

平井 「昔、会社やっていた頃、うちで働いていた奴にさあ、足が納豆の臭いの奴がいてさあ。

営業やつてる奴だったんだけどね、会社戻ると、靴脱ぐんだよ。そうすると、ぷー

んて、納豆の臭いが漂うんだよなあ。あれ、みんな参ってたなあ。すごーいんだよ、

プーン…、」

睦雄が立っている。

睦雄 「だれこれ」

千絵 「あ、ええと、調査員の」

睦雄 「は？ 調査員、お前、適当なこと言ってるなよ」

睦雄、千絵をはたく。

平井、勢いよく立ち上がる。

睦雄 「誰なんだよ」

千絵 「だから、ほら、テレビの」

睦雄 「ああ？」

平井 「わたくし、一般家庭における台所動線調査の為に派遣されております、調査員の平井です」

睦雄 「あっそ、で？」

平井 「は」

睦雄 「その調査員の平井さんが、こんな時間からなんで納豆こねてんですかっつってんだよ」

千絵 「……協力してもらってるの」

睦雄 「は？ なんの協力だよ、お前、一人じゃ納豆もこねらんねえのか」

睦雄、千絵を小突く。

平井 「あの、ご主人」

睦雄 「ああ？」

平井 「ええと、本来ですね、この調査におきましては、ご夫婦が揃ってご在宅であることが条件となっておりますね、」

睦雄 「知らねえよ」

平井 「いえ、ですから、本来は、ご主人がご不在のご家庭での調査は、」

千絵 「違反なの」

睦雄 「知らねえよ、うるせえな」

千絵 「だって、睦雄くん、トリニトロン喜んでたじゃない」

睦雄 「はあ？」

千絵 「喜んでたでしょ、トリニトロン。うちのテレビ壊れてるし、新しいの欲しかったんですよ、トリニトロンあれば、他の女んどこ行かないよね、ね？」

睦雄 「バカか、お前は」

千絵 「だって言ってたじゃない、女いるって、二十型のカラーテレビあるんだって、ずっとそこにいたんでしょ、うちのテレビ白黒だし壊れてるし、二十型の方がいいもんね、カラーテレビきれいだよね、だから女んどこいたんでしょ、しょうがないよ、二十型だもん、でもさ、トリニトロン届いたら電話しろって言ってたよね、帰って来るって言ってたよね、だから助けてもらったの、嘘つくの協力してもらって、もう今日でおしまいだから、そしたらトリニトロンもらえて、そしたら睦雄くん帰ってきて、そしたら今度こそ、今度こそ、元気な赤ちゃん産むから、そしたら私たちが普通の、幸せな家族になれるから」

睦雄、千絵の横面を張り飛ばす。

平井 「おまえ、いい加減にしろ」

睦雄 「千絵、お前、喋ったのか、このおっさんに、喋ったのか」

千絵 「しゃべってない、しゃべってないよ」

睦雄 「ほんとだな、お前、おっさんに喋ったんじゃないのか」

千絵 「なにもしゃべってない」

睦雄 「ほんとだな。お前、絶対言うなよ。何があっても、あのことだけは絶対に言うなよ。」

お前、もし喋ったら俺たち終わりだぞ。離ればなれになるんだぞ。そしたらどうすんだよ、お前、生きていけんのか、お前、俺と離れて生きていけんのかよ、俺やだよ、俺はやだからな、お前なしで生きてくのなんてやだから俺、赤ん坊なんかいいんだよ、カラーテレビなんていらなんだよ、俺たち二人で、東京で、こうやって生きていけたら、それでいいんだよ」

平井、そうっと出て行く。

睦雄

「俺、どうしていいかわかんないよ、あんなことあって、お前一人苦しめて、いつまでも泣いてばかりで、俺、何もしてやれなくて、どうしていいかわかんないんだよ。俺だって千絵のそばにいたかったよ、だけど売れないんだもんブリタニカ。ブリタニカ売らないと俺たち食っていけないだろ、しょうがないんだよ、そりゃ世の中はさ、カラーテレビだの車だの、景気いいことばかり言うけどさ、現実はきびしいって。俺、何も贅沢させらんないし、約束してた新婚旅行の箱根だって連れて行けてないし、お前が壊れたミシンだとか、映らないテレビだとか、いつまでも大事に使ってんの見ると、情けなくてどうしようもないんだよ、あのときだって、あのときだって俺さ、」

千絵

「いいよ、もういいよ、睦雄くん、もういいから、わかってるから」

睦雄

「ああするしかなかったんだよ」

千絵

「わかってる、わかってるから」

夫婦、抱き合って泣いている。

暗転。

吉田家、調査三日目の朝。

台所で黒電話が鳴っている。

食卓で突っ伏して寝ていた吉田が目覚め、電話を取る。

吉田 「はい、吉田です……はい…… 涙声になる） ……はい……わかりました。すぐ伺います。
……ありがとうございます……」

受話器を置いた吉田、内野の姿を探して見渡すが、内野の姿はない。

吉田 「…… 大きなため息」

と、内野が戻る。

内野 「あ、おはようございます」

吉田 「内野くん、まだ、いたの」

内野 「卵、なかったんで」

吉田 「卵」

内野 「僕、目玉焼きしか作れないんですけど、朝飯、目玉焼きでいいですか」

吉田 「…… 声をあげて泣く」

暗転。

正午の公園。

平井が、調査表を片手に缶ビールを飲んでいる。

その足元にも、いくつかの空き缶と、まだ開けていない缶がある。

平井 「…… 呑打ちしたり、ため息をついたり、げっぷをしたりしている」

睦雄がくる。

平井 「あ」

睦雄、生真面目な顔で、頭を下げる。

平井が不機嫌そうに会釈を返すと、睦雄、遠慮がちに隣りにくる。

睦雄 「……」

平井、足元から新しい缶を一つ取って、睦雄に渡す。

睦雄 「あ……いただきます」

二人、黙って缶ビールを飲む。

睦雄 「……うちのオヤジ、酒、だめなんですよ」

平井 「……ああ、そう」

睦雄 「下戸なんです」

平井 「……」

睦雄 「お袋は、飲むんですけどね」

平井 「……」

睦雄 「オヤジ、俺が飲み始めたとき、妬いてたんですよ」

平井 「……」

睦雄 「実家、広島なんですけど、正月に、帰るじゃないですか。で、あけましておめでとうって、お袋とビール飲んでると、オヤジ、すぐ不機嫌になって……あれ、妬いてたんですねえ」

平井 「……ご主人さ、」

睦雄 「はい」

平井 「言っとくけど、妬かれるようなこと、何も無いから、奥さんとは」

睦雄 「はい」

平井 「大体ご主人さ、あれはないよ。まともに話も聞かないで、いきなり手上げるなんてのはさ、あれはないだろう」

睦雄 「はい」

平井 「あんた、自分がやましいから、疑うんだよ」

睦雄 「……」

平井 「見捨てられてからじゃ遅いんだよ」

睦雄 「……俺、ないんすよ」

平井 「……なにが」

睦雄 「ないんすよ、何も、女とかそういう」

平井 「……よそに女がいるって泣いてたよ、奥さん」

睦雄 「嘘です。いません。そんな甲斐性もないし、千絵のこと、愛してるんで」

平井 「そんなバカな話あるか。なんでそんな嘘つくんだ。泣いてたんだぞ、見ず知らずの俺の前で、初めて会ったのに」

睦雄 「あいつ、こないだ流産したんです」

平井 「……」

睦雄 「鈍臭い女でしょ。あんだけ子ども欲しがってたのに、子どもできてんの気がつかなくて、ほら、スタイリーってあるじゃないですか、コマーシャルやってる美容器具

あいつ、一時間もあれやってたんですよ……いきなりお腹痛いっつってトイレこもって、真っ青な顔して出てきて、こうやって、…両手を平井に向けて差し出す）
…赤ちゃんが産まれたって、泣きながら笑って…俺、叫びましたよ。だって、血まみれの、肉のかたまりみたいなの、こうやって持って来るんですから、頭おかしくなっただけかと思って思うでしょ、俺、叫んで逃げ回ったんですよ。そうしたらあいつ

どうして赤ちゃん抱いてくれないのって泣き出して、血まみれのそれ、ずっと離さなくて、いくら俺に貸せ、俺にも抱かせろつつつても、狂った猫みたいになつて

「晩中抱いてるんですよ。……俺、あいつぶん殴って、それ取り上げて、ビニール袋に入れて、ポストンバッグに詰めて、渋谷駅行つたんです。こないだ事件あったでしょ、コインロッカーベイビーって、新聞に出てましたよね。全国で起きてるんですね、あれ。……俺も、ポストンバッグをコインロッカーに入れて、知らんぷりして帰ってきました。……半狂乱だろうな、赤ちゃんはどこって俺に掴み掛かるんだらうなって覚悟してたんですけどね……あいつ、何も言わないんですよ。何も言わないで、血がぼたぼた零れてる台所の床、必死になって拭いてるんです。俺が、おいって声かけたら、おかえりって、笑うんです」

平井 「……ため息」

睦雄 「俺、どうしたらよかつたんですかね」

睦雄、缶ビールを一気に飲み干す。

睦雄 「やっぱ、警察とか行かないとまずいすかね。そしたら、俺、どうなるんですか。俺逮捕ですか。そしたら、あいつどうなるんですか」

平井、もう一缶を開けて、勢い良く呷る。

睦雄 「……平井さん、でしたよね」

平井 「うん」

睦雄 「うちのこと、通報しますか。……しますよね、そりや。あんなだけ騒がれてる事件の一つですもんね」

平井 「しない」

睦雄 「……」

平井 「しないよ、通報なんて…… 犬あくび」

睦雄、黙って立ち、深々と一礼して、立ち去る。

平井、ベンチにごろりと横になり、調査表を見つめて、ため息。
寝袋と小さなポロイテレビを担いだ内野がやってくる。

内野 「もうそんなに飲んでるんですか」

平井 「ああ？ ああ」

内野 「まだ昼ですよ、社長、調査、どうしたんですか」

平井 「調査…調査ねえ」

内野 「どうしたんですか」

平井 「お前こそ、どうしたんだ調査、まだ昼だぞ」

内野 「……いや、なんか台所って、息詰まるなああって思って…ちよつと散歩に」

平井 「なーにが散歩だよ、つとにいい加減な奴だなあ」

言いながら、新しい缶ビールを内野に渡す。

内野 「あ、どうも」

内野、開けて、ぐびぐびと飲む。

おもむろに、調査表を取り出して、破き捨てる。

平井 「あ、なんだ、内野、こらこら、まずいってそれ」

内野 「実は、ご報告しなければならぬことがあるんです」

平井 「……舌打ち」

内野 「僕が担当した吉田さんの調査、失敗でした…報告できません」

平井 「……大体さあ、台所ってのは、人の生活の真ん中だろ…内野が破いた調査表の紙片を拾い集める…見せたいもんも隠したいもんも全部そこにある、いわば人生のな、いっちゃん真ん中とこなんだよ。そこんところをさあ、都合良く三日くらい覗いて、はいおつかれさまトリニトロンって、それじゃあ済まないよなあ」

別の空間に吉田の姿が浮かぶ。

天井から下がる縄の輪、首を入れる吉田「消える。

平井 「いつかさあ、マイホーム持つてる、マイカー持つてる、マイテレビ持つてるっての
で人生だの幸せだの計られるようになるんだ……」

内野 「僕、マイテレビ、持ってます」

平井 「ぼかやろう……なにが、あなたは幸せでしたかだってえの、なあ、そんなの、答え
られないもんじゃないのか」

別の空間に、千絵の姿「米を研ぐ千絵。

平井 「内野くん、ぼかあね、この仕事やってて、一つわかったことがあるんだ。それはね
ひとの幸せの加減ってのは、米を研ぐ音に出るってことだよ。ぼかあね、内野くん
そのひとが米を研ぐ音を聞けば、そのひとがほんとうに幸せかどうか分かる。こ
れだけは、誰も誤摩化せないんだよ」

千絵のいる空間に、睦雄の姿「なあ、おっさん、布団取りにくんのかな」

「いいよ、捨てて」「でもさ」「いらないもん溜め込むなって言ったの睦雄

くん

でしょ」「そっか。そうだな、せんべい布団だし、いっか」仲の良い二人。

内野 「社長、飯、行きましょう、昼時だし、俺が奢りますから」

平井 「よし…… ちんぷらと立ち上がる」内野くん、「

内野 「はい」

平井 「ぼかあね、あのひとは、ああみえて、その実、幸せだったと思うんだ」

内野 「誰ですか、あのひとって」

平井 「米の音でわかるからねえ、うん……あ、おい、俺の布団、どうした？」

内野が千鳥足になった平井を支えて、去って行く。

別の空間の持丸家「ドアチャイムの音。

睦雄が出る。

睦雄 「おーい、トリニトロン、届いたぞ！」

溶暗。